



有限会社ふぁむ【徳島県鳴門市】

代表者名：井丁 俊

事業概要：サツマイモの生産・加工

経営規模：8.0ha（サツマイモ8.0ha）

従業員数：15名（役員4名、従業員11名）、アルバイト7名

特徴的な取組

1. 周辺農家を巻き込んだサツマイモペーストの生産により地域農業活性化に貢献

大毛島地域はサツマイモを多く生産する地域であるが、規格外品も多い状況。そうしたなかで、加工（ペースト化）することで付加価値をつけ、地域農家にとって、サツマイモの再生産が可能となる価格帯で買取りを実施。これらを通じて地域農業の活性化に貢献。



2. 当社加工品（ペースト）を生かしたスイートポテト製造・販売による地域活性化

当社と一体的に事業運営している株式会社丁井にて当社が製造したペーストをもとにスイートポテトを製造・販売。年間で365万個売り上げているヒット商品で、当商品の収益をもとに地域農家から再生産可能な価格帯でサツマイモを買取りできており、地域農業活性化に貢献。



3. 高い営業力によりヒット商品を生み出す

代表は高校在学時より自分で生産した農産物を自ら売り込みするなど、積極的な行動力、高い営業力がある。そうした経験等をもとに、地域外においても商品販売を行い、スイートポテトをヒットさせる。加工品を開始する際も、銀行との難易な交渉を成功させ、設備投資を実現できた。



《地域の特徴》

大毛島は鳴門市北東部に位置する島。島内は砂地が多いため、なると金時、鳴門らっきょ、スイカなどが盛んに栽培されている地域。



《経営の沿革》

昭和55年：代表丁井 俊がたばこ・ラッキョウで就農開始。

昭和61年：株式会社丁井（現代表：丁井淳史）を設立。

平成5年：農産物生産・加工を目的に有限会社ふぁむを設立。

平成10年：「お百姓さんの作ったスイートポテト」商標登録。

現在（令和6年3月）は、かんしょ8ha、売上高76百万円、従業員数15名となっている。株式会社丁井を含めると総売上高5.1億円。

12



株式会社ナカシマファーム【佐賀県嬉野市】

代表者名：中島 大貴

事業概要：酪農、飼料作物、チーズの製造・販売、飲食店経営

経営規模：酪農97頭、飼料作物15.3ha

従業員数：9名（役員4名、従業員5名）

特徴的な取組

1. 酪農DXに取り組み、省力化を実現

牛の状態を常に管理しつつ、かつ従業員の長時間労働を削減するため、AIを活用した牛管理システムを導入。搾乳牛にウェアラブルデバイスを装着し、データを可視化。重要な判断時期を個体ごとに把握でき、受胎率が向上し、乳量も増えた。労力の削減と省力化をこれからも、進めていく。



2. 排泄物の処理と堆肥化により、循環型酪農を実現

大量に出る家畜排せつ物を処理すると同時に堆肥化し、牛舎の敷料として使用するほか、飼料作物を作る自社水田で利用の他、近隣耕種農家に供給している。配合飼料には乳酸菌添加飼料を混ぜて給餌。堆肥中の豊富な微生物により、病気の原因菌の増殖が押さえられ、乳房炎等の発生も無くなった。自社で営むカフェでは、生分解性のカップを使用。これも堆肥となっている。



3. 飼料用米、大麦生産に取り組み、飼料自給率が向上

輸入飼料の高騰が続く中、生産資材価格を抑えるために食用米から飼料用米へ移行し、自家飼料のWCSを増やした。玄米の形態で利用される飼料用米の栄養価は、牛にとって優れたエネルギー供給源といえる。水田では、稲と大麦の2毛作を行っており、全国的にも例の少ない大麦WCSづくりにも挑戦している。



《地域の特徴》

嬉野市は、県南西部に位置し、なだらかな山間
で霧深く、昼夜の温度差があり日照量の条件が、
茶の栽培に適した地域。



《経営の沿革》

昭和60年： 現代表の祖父が個人創業。
平成7年： 現代表の父親が法人化。
平成21年： 現代表が就農。
平成24年： チーズ製造を開始。
令和3年： 現代表が取締役に就任。

現在（令和6年3月）は、経産牛52頭、育成牛48頭、飼料畑15ヘクタール、売上高1千万円、従業員数9名となっている。



フィールドマスター合同会社【熊本県八代市】

代表者名：林 孝憲

事業概要：稲WC S、牧草イタリアンライグラス、稲WC S収穫受託

経営規模：26.5ha（稲WC S 14ha、牧草イタリアングラス10ha他）

従業員数：8名（役員4名、従業員4名）

特徴的な取組

1. スマート農業の導入による作業の効率化を実現

半径10km以内にある500枚以上の圃場で収穫を行うため、紙の地図での共有は限界を感じていた。そこで、アグリノートを導入し、収穫圃場のオンライン管理を行っている。作業者がスマートフォンで場所の確認ができ、収穫ミスや刈忘れ、輸送チームの迷子防止、新規農業者へのレクチャーの省力化も可能となった。



2. 耕畜連携による持続可能な農業の実践

八代市は稲WC Sの栽培が盛んだが、畜産農家は少なく優良な堆肥が手に入らない一方で、当社の稲WC Sの販売先である熊本県北部畜産地帯では、堆肥の在庫過剰が問題となっていた。この双方の課題を解決するため、稲WC Sの配送の帰り便を利用した低コストでの堆肥の販売を実現。畜産農家へは高品質堆肥づくりに見合う対価を支払い、耕種農家には稲WC S栽培での有機物持ち出しによる地力低下を防ぎ、化成肥料の減量に役立つ良質な堆肥を提供している。



3. 地域農業の魅力を積極的に発信、地域を活性化

干拓地であったという八代市の歴史や農業について伝え、他地域では珍しい稲WC S栽培・収穫に関わる機械が動く様子を各種SNSに投稿している。また、地元の小学生を対象とした農業体験イベントやアグリオリンピックといった農業スポーツイベントも開催、地域を巻き込んだイベントは、地域活性化の一助にもなっている。



《地域の特徴》

八代市の平坦地域では水稻・い草・野菜・花きなどの多彩な作物が生産され、年間を通じた複合経営と施設野菜を中心とした専作経営が行われている。特に冬春トマトは日本一の産地となっている。い草からの転換作物としてブロッコリー等の露地野菜が年々増加している。

八代市



《経営の沿革》

平成28年：フィールドマスター合同会社を設立。耕種農家が栽培した稲WC Sを県北部の畜産農家へ販売する事業形態を確立。

平成28年：現代表が就農、自社へ入社。
令和3年：代表に就任し、経営を継承。

現在（令和6年3月）は、稲WC S 14ha、牧草イタリアングラス10ha、稲WC S収穫受託133ha、売上高6千万円、従業員数8名となっている。

14



株式会社宮崎茶房【宮崎県五ヶ瀬町】

代表者名：宮崎 亮
 事業概要：有機茶葉の生産、加工、販売
 経営規模：14.8ha
 従業員数：25名（役員3名、従業員22名）

特徴的な取組

1. こだわりの商品づくりで多様化した消費者需要に対応

25を超える品種を有機栽培し、地域特産の釜炒り茶、烏龍茶、紅茶など多様な茶種に加工。消費者ニーズに対応できる商品づくりを行っている。希少価値の高い釜炒り茶については、早くから有機JAS認証を取得し、海外輸出も8ヶ国を超えている。



2. 独創性の高い烏龍茶生産による新たな市場開拓

緑茶用品種は香気発揚が弱く、国内では香りの高い烏龍茶生産は難しいと考えられる中、烏龍茶生産の技術開発にいち早く取り組み、外国産烏龍茶とは異なる国産烏龍茶の新たな市場を開拓している。地域ならではの既存の緑茶用品種を用い、地質を活かした少肥栽培を行うことで、これまでにない香りの高い国産烏龍茶の生産を実現。日本茶アワードや紅茶博覧会等のコンテストで幾度となく上位に入賞している。



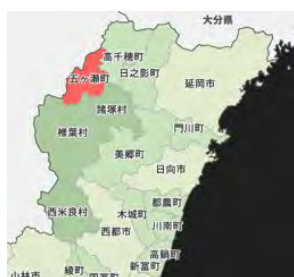
3. 消費者交流型マーケティング活動で、中山間地を活性化

来訪者の要望に応じて試飲会や茶園見学、隣接する体験施設での釜炒り茶、紅茶、烏龍茶の簡易な製茶体験等、可能な限り対応しその声を商品に反映させている。五ヶ瀬の美しい景観や独自性の高い多様なお茶の魅力に惹かれ訪れる来訪者は、消費者だけにとどまらず、茶専門業者、小売店、外国からの観光客等、年間約600名にのぼっている。



《地域の特徴》

五ヶ瀬町は、九州のほぼ中央、宮崎県の北西部にあり、宮崎の西の玄関口に位置する。全国有数の生産量を誇る釜炒り茶や園芸、畜産、洋花、ぶどうの他、林業も盛んである。釜炒り茶に関しては、五ヶ瀬町の令和5年度の茶生産戸数は20戸、茶栽培面積は65.1haとなっている。



《経営の沿革》

平成3年：現代表就農。
 平成13年：有機JAS認証取得。
 平成14年：農林水産祭にて《天皇杯》の栄誉授与。
 平成19年：法人設立。
 平成26年：日本茶AWARDプラチナ賞。（発酵系のお茶）

現在（令和6年3月）は、茶14.8ha、売上高1億7千9百万円、従業員数25名となっている。



株式会社高田牧場【長崎県南島原市】

代表者名：高田 紳次

事業概要：肉用牛肥育事業（繁殖・肥育一貫経営）

経営規模：繁殖牛175頭、肥育牛920頭（令和5年12月現在）

従業員数：8名（役員2名、従業員6名、臨時雇用2名）

特徴的な取組

1. 多様な品種・生産方式による大規模生産に取り組み、消費者に求められる肉牛出荷を実現

複数の品種（黒毛、褐毛、交雑種等）や肥育方式（一貫、去勢・雌の一般肥育、老廃等）を組み合わせ、多様な肉牛を扱い、「雲仙和牛」ブランドを中心に、高価格帯から低価格帯まで供給可能な体制を構築。その結果、平成20年は1店舗との取引であったものの、現在は約30店舗と取引を行っており、販路拡大が実現された。

2. 自給飼料生産によりコスト削減等を実現

材料費のうち高い割合を占める飼料費が高騰しているため、畜産クラスター事業を活用して、混合飼料施設を整備し、周辺農家の協力を得て、13haの圃場を確保し、自給飼料生産と未利用資源を活用することによりコスト削減と地域循環型社会の構築を実現した。

3. 食品安全の確保への取組

一般的な衛生管理に加えて、重要な危害要因に対する対応方法を明確化した高度な衛生管理（病原体侵入リスク分析に基づく衛生管理方法の策定、治療履歴の保管など）に取り組む。また、肥育牛出荷の際は生産履歴（飼料給与履歴）を添付し、消費者の食品安全に関する信頼性確保への取組をしている。



《地域の特徴》

長崎県南島原半島東部に位置し、温暖な気候を活かして、ばれいしょ・トマト・みかん等が栽培されており、農業が基幹産業となっている地域。また、生産意欲が高い農家が多い。



《経営の沿革》

昭和45年：現代表の祖父が個人創業。
平成12年：2代目社長に現代表者の父が就任。
平成18年：3代目社長に現代表者の高田紳次氏が就任。
平成21年：法人化し、株式会社高田牧場設立。

現在（令和5年12月）は、繁殖牛175頭、肥育牛920頭と飼育頭数は1000頭越えており、売上高10億円、常時雇用8名となっている。

16



吉牟田 太【佐賀県嬉野市】

代表者名：代表 吉牟田 太

事業概要：野菜・花苗生産

経営規模：3.6ha（野菜苗・花苗 14,680㎡、水稻 2.11ha）

従業員数：46名（家族2名、従業員44名）

特徴的な取組

1. ユニークな委員会の設置等、従業員の資質向上のための職場づくりにより、安定した苗生産を実現

苗生産は高度な技術が必要で、従業員の継続した労働や資質向上することが、安定した苗生産をするうえで必要であった。

そのような中、各種委員会（品質向上委員会、スマイル向上委員会等）を設置することで、従業員どうしのコミュニケーションが活発となり、作業効率向上や離職率低下により安定した苗生産を実現できた。

品質向上委員会	ホッパイ委員会	スマイル向上委員会	5S徹底
岡 尾形	山田 山口	尾崎 杉本	福田
永石 中村	小柳 藤原	諸井 蒲原	秋山
宮田 中村	光武 吉川	森田 松尾	石井 宮
秋月 ラン	松尾 高田	ラム	馬場 ス
トイ	リン シー		吉牟田
	山口		高村

2. 作業マニュアル作成や生産管理システムの導入により、作業効率を向上

苗生産においては、多様な品目・品種を同時に栽培するため、品目・品種ごとに栽培管理や進捗管理が必要ななか、「従業員マニュアル」、「生産管理システム（恵）」を導入することで、生産を見える化し、苗生産の作業効率向上を実現した。



3. 従業員の意見や研修会などの情報を積極的に取り入れ、働きやすい環境づくりを行っている

自社で働く人がコミュニケーションを積極的にとり、働きやすい、働き甲斐のある職場となることを目的に、他社への視察や研修会、また従業員の意見を積極的に取り入れ、柔軟な思考により新たな取り組みを積極的に取り入れ、大規模雇用経営を実践している。



《地域の特徴》

嬉野市は、県南西部に位置し、なだらかな山間で霧深く、昼夜の温度差があり日照量の条件が、茶の栽培に適した地域。



《経営の沿革》

平成16年：親元就農。

平成20年：野菜の接ぎ木苗の生産を開始。

令和元年：現代表の吉牟田太へ代表変更。

現在（令和5年12月）は、野菜苗・花苗を中心に生産し、売上高2.8億円、従業員は46名となっている。

ユニークな委員会を設置し、従業員が働きやすい環境を整備し、安定的な苗生産を実践している。



山口 仁司【佐賀県武雄市】

代表者名：山口 仁司

事業概要：キュウリ、水稻、直売所向け野菜生産

経営規模：1.42ha（施設キュウリ5,600㎡、水稻0.72ha、
直売所向け野菜0.15ha）

従業員数：5名（家族3名、従業員2名）、アルバイト11名

特徴的な取組

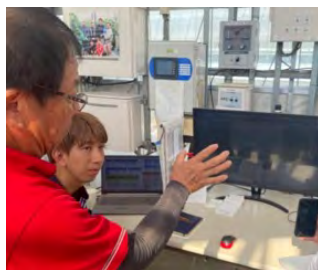
1. トレーニングファームを中心に研修指導を行い、担い手づくりに貢献

個人経営では限定的になる研修の規模をJAと連携することにより多くの就農希望者を育成できる研修体制（トレーニングファーム）を整えた。トレーニングファームを中心に研修指導を行い、累計30名程度、就農を実現し、県内新規就農者数や地域農業の維持発展に大きく貢献できている。



2. 自身の生育技術を次世代に合理的に継承することで、研修修了生は高レベルな技術を習得

これまで積み上げてきた技術を次世代に継承。勘と経験に頼らない行動による技術を複合型環境制御装置やデジタル学習コンテンツにより伝承。結果として、研修修了生約30名の多数が、佐賀県トップレベルの収量40t/10aを達成と生育技術は高レベルを実現している。



3. 先駆的な取組を積極的に実施

硬質フィルムハウス（昭和59年）や複合環境制御装置（平成9年）等は佐賀県内で当人が初めて導入している。

その他、ヒートポンプや耐病性品種の導入、自動かん水システムなど先進的な技術をその時々で導入しており、先駆的な取組を積極的に実施している。



《地域の特徴》

武雄市は山林面積が50%を占めるなど雄大な山々に囲まれ、豊かな自然にあふれている。米麦を中心に、施設キュウリや青梗菜、アスパラガス、いちご等が主な農畜産物となっている。



《経営の沿革》

昭和44年：高校卒業と同時に就農

平成19年：佐賀県指導農業士認定

平成29年：JAトレーニングファームの講師

令和元年：佐賀県農業大学校特任講師を務める

現在（令和5年12月）は、施設キュウリ5,600㎡等の生産やトレーニングファームの講師を務めて担い手づくりに注力している。売上高79百万円、従業員数5名となっている。

18



有限会社農園ビギン【新潟県小千谷市】

代表者名：南雲 信幸

事業概要：水稻、園芸（甘藷、カリフラワーなど）、加工

経営規模：33.8ha（水稻28ha、甘藷1.0ha、カリフラワー0.8ha等）

従業員数：9名（役員3名、従業員6名）、アルバイト6名

特徴的な取組

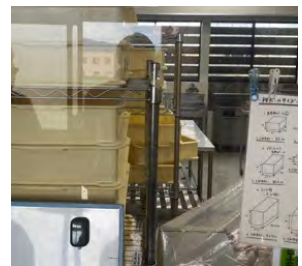
1. 宿泊できる研修施設を整備し、研修生を受入れ、農業従事者の増加に貢献

平成19年に新潟県指導農業士認定以来、年々の農業教育の意欲が高まり、担い手育成を開始。宿泊施設を整備のうえ、農業学生（短期間）や就農希望者（2～3年）に対して、多角的な経営についての研修を実施し、2名の独立就農者を輩出している。また、学生の研修受入者も県内外に就農や農業法人へ就業し、農業従事者の増加に貢献。



2. 経営多角化により豪雪地帯においても通年雇用が実現

中山間地域で豪雪地帯のなか、農産物生産だけでなく、冬期のサツマイモ加工・販売を開始し経営を多角化することで、通年雇用が実現でき農業経営基盤の強化が図れた。



3. 消費者ニーズへの対応により販売力強化を実現

販路拡大のため、県内直売所やECサイト、自社のHPを活用し直販比率を高めることで、固定客を確保しつつ、消費者ニーズを把握できている。

また、直販比率を高めることで利益率向上に寄与している。



《地域の特徴》

小千谷地域は緩傾斜地帯が多く、水田と園芸農業が盛んな地域。園芸では、スイカ、メロン、カリフラワーが主に栽培されている。



《経営の沿革》

昭和49年：現代表が小千谷市で就農。

平成2年：有限会社農園ビギンを設立。

平成19年：指導農業士認定。

平成26年：小千谷市農業活性化協議会を設立。
（現在：会長）

現在（令和6年2月）は、水稻28ha、甘藷1ha、カリフラワー0.8ha等の農業生産や甘藷加工・販売を行っており、売上高79百万円、従業員数9名となっている。

令和 6 年 12 月 20 日発行

当現地調査報告書は、令和 6 年度経営発展・就農促進委託事業のうち全国優良経営体調査等委託事業の現地調査結果を踏まえ、一般社団法人全国農業会議所が作成したものです。

